

『ユメリリ ジ 幼なじみカップル観察日記 ジ』

特典シナリオ台本

【登場人物】

葉月ユメ（はづき ゆめ）（18）

大学一年生。リリとは小さい頃からの幼馴染み。

高校の時にリリに告白しありに気持ちを確認しあつたが、受験勉強に集中するために

「付き合うのは大学生になつてから」という約束を一人でした。

無事大学に合格し、晴れでリリと恋人同士に。

今まで我慢してきた分、積極的にリリと距離を縮めようとする。

察するよりもはつきり言いたい。追われるよりも追いたいタイプ。分け隔てなく付き合えるため交友関係は広い。

『年齢』18歳 『身長』156センチ

『血液型』B型 『バスト』D

城咲リリ（しろさき りり）（18）

大学一年生。ユメとは小さい頃からの幼馴染み。

どちらかというとボーカルだったリリにとつて、
ユメはオシャレで可愛く、憧れの存在であった。

クールビューティー感のある見た目から女の子ファンも多い。
ユメの助言により髪を伸ばし始める。（大学デビュー）

本人は恥ずかしがり屋で、ユメのアピールにうまく追いついていけない。

『年齢』18歳 『身長』162センチ

『血液型』A型 『バスト』C

【あらすじ】

葉月ユメと城咲リリは付き合いたてのカップル。

大学生になって晴れて恋人同士になつたものの、
幼馴染の期間が長かった二人は、

「恋人」としてどう振る舞つていけばいいのか戸惑う日々。

積極的に距離を縮めようと/or>するユメと、

ユメのアプローチに恥じらいを隠せないリリ。

これは二人がゆっくり恋を育んでいく様子を
ぬいぐるみや観葉植物などの視点から、
ひそかに見守る百合観察音声作品です。

【Scene01：ブルーム・マインド -ぬいぐるみ視点-】

▼ユメの部屋（昼）

・ユメの部屋にある「ぬいぐるみ」の視点。

1Kの部屋。ユメは引っ越してきたばかりで、テレビ・ベッド・冷蔵庫など業者がやつてくれたものが揃っているが、食器・雑貨はまだダンボールにしまったままである。

ユメは「荷ほどきを手伝って欲しい」とリリを部屋に招く。遠くの方で声が一人の声が聞こえる。

ユメ、玄関のドアを開ける。

ユメ「さあ、入つて入つて」

リリ「おじやまします。

（玄関に飾つてある花瓶をみて）かわいいね、花

ユメ「いいでしょ？駅前のお花屋さんで買ってみたの」

リリ「ちゃんと水あげなきやだめだよ？」

ユメ「わかってる」

リリ「ほんとに？」

二人、扉を開けて部屋に入つてくる。

ユメ「ほんと！もう、子供扱いして」

リリ「心配なの」

ユメ「私、バイトだつて始めたんだから……。はい、ここが私の部屋でーす」

リリ「おー、……『ちやご』ちやしてない」

ユメ「綺麗つて言つてよ」

リリ「ほら、実家の部屋知つてるからさ。新鮮。

ユメが一人暮らしかあ」

ユメ「リリだつて、もうしてるじゃん」

リリ「私は実家でも家事ちゃんとしてたけどさ。

大丈夫？ 自炊とか」

ユメ「別に、外で買うからいいもん」

リリ「栄養偏る」

ユメ「じゃあ作りに来て」

リリ「有料になります」

ユメ「えー、なんでー。」

（まだ言いなれてない様子で）カノジョなのに？」

リリ「んく。……たまになら」

ユメ「やった」

ユメ、ソファへ移動。

リリ「（部屋を見渡して）ねえ、私さ、今日片付けて呼ばれたんだよね？」

ユメ「そうだよー」

リリ「特に、やることない気が…十分片付いてるし」

ユメ「そこにダンボールあるでしょ？」

仕分け手伝つて欲しくて。

あんまり確認しないで入れてきたから」

リリ「てっきり私、何か組み立てたりするかと」

ユメ「あ、お茶飲む？」

リリ「え、あ、うん」

リリ、ソファーへ移動。

ユメ、ペットボトルを開けてお茶を注いで行く。

リリ「あ、このコップ、ユメがよく使ってるやつ」

ユメ「そうそう。はい」

リリ「ありがと」

リリ、コップのお茶を軽く飲む。

ユメ「リリが飲む用のコップも買わなきゃね」

リリ「私の家から何か持ってくる?」

ユメ「せっかくだから、新しいのもいいよね。

お揃いのとか!」

リリ「なんか一緒に住むみたい」

ユメ「私は、一緒に住んでもよかつたんだけど?」

リリ「それは、難しかったよ。」

家族なんて言えばいいのか」

ユメ「えー、そうかなあ。」

『ユメと一緒に部屋に住むんだ!』って言えば、
わかってくれると思うけど?

幼なじみなんだし」

リリ「幼なじみは万能じゃないよ。
もう大学生なんだしさ」

ユメ「そうだよねー。」

やつと、大学生になれたんだもんねー」

ユメ、腕を絡めてくつつく。

リリ「ちょ、ちょっと!」

ユメ「なに?」

リリ「くつつきすぎじゃない?」

ユメ「えー、そうかなあ?」

リリ 「頬、近い…。

さつきお昼食べたばかり」

ユメ 「気にしない気にしない」

ユメ 「(髪の匂いを嗅ぐアドリブ) くんくん。

リリのにおい……すき……」

リリ 「も、もう、ほら！ 片付け！ 片付けしょ！」

ユメ 「ああー！

もうちょっと、ゆっくりしようよ」

リリ 「やることやつたらね！

ダンボール、あけるよ？」

リリ、近くにある段ボールを開ける。

ユメ 「(不満そうに) ん〜〜」

リリ 「ユメが手伝って、って言つたんでしょ？」

ダンボールの中には、

実家のユメの部屋にあつた本、アルバム、照明、置物などが入つていてる。

リリ 「わ〜！ 懐かしい！

ユメの部屋、思い出すなあ」

ユメ 「結構遊びにきてたでしょ」

リリ 「高三の時は、受験勉強でほぼ行かなかつたし。

あ、この漫画、昔、貸して貰つたなあ」

リリ、嬉しそうにダンボールの中を物色していく。
その様子に対し、ユメは少し冷めた様子である。

リリ 「ざつと見たところ、本と小物が多いね。
これ全部出す？」

ユメ 「まあ、とりあえずは」

リリ 「何処においたらいいかな」

ユメ 「んー……」

リリ 「この辺りとかは？」

リリ、ぬいぐるみが飾つてあるところまで近づく。

リリ 「ぬいぐるみ置いてあるし、

置物系は並べたら見栄えよさそうじゃない？
で、本のスペースは……」

ユメ、リリに近づいて背中から抱きしめる。

リリ 「ユメ、どうしたの？」

今日、なんか……」

ユメ 「……ここまで、我慢したんだよ？

いっぱい、我慢した」

リリ 「ユメ……？」

ユメ 「付き合うのは、大学生になつてからつて約束、ずっと守ってきた。
もう、いいでしょ？ 恋人らしいことしても。

リリ。ここが何処だかわかる？」

リリ 「ユメの家……」

ユメ 「違うよ。彼女の家だよ。

こっちむいて」

ユメ、リリに抱きつく。

ユメ「二人っきりになれたのに。

私だけ意識してるなんて、そんなのずるい」

リリ「……違う。私だって、ドキドキはしてたよ。

でも、片付けが……」

ユメ「にぶい。にぶちん。にぶりり。

はじめて、部屋に呼んだんだよ？

もう幼なじみじゃない、恋人同士なんだよ？」

リリ「……うん。そうだよね」

ユメ「(愛しそうに呼ぶ) リリ……」

リリ「ユメ……」

ユメ「……んー?」

キス、しないの?」

リリ「え」

ユメ「いま、するタイミング」

リリ「え、あ、その……」

あ、あ～～、ちょ、ちょっとごめん!

お手洗い行つてくるね!」

ユメ「え、あ……」

リリ、部屋から出でていく。

一人になつたユメ。独り言をつぶやく。

ユメ「露骨に避けられた……。

……急すぎたかな。

でもさ、リリからはきてくれないもん」

ユメ「私から行かないと。

このままじゃ、幼馴染のままになつちゃう」

ユメ「……（ため息）はあ。

出会った時から、恋人だつたらよかつたなあ」

ユメ、ぬいぐるみを抱きしめる。

ユメ「私は、もつと触れたい。
……触れたいよ。リリ」

【Scene02：きみの知らない庭 -植物観点-】

▼喫茶店・テラス（昼）

・喫茶店に飾られている観葉植物の視点

Scene01 の次の日。

リリは、ユメのバイト先に顔を出すことに。
その喫茶店は庭付きの自然あふれるカフェ。
風で木々が揺れる音、鳥の声を聞きながら、
ユメがくるのを待つ。

リリ「（見渡してぼそっと独り言）おしゃれなカフェ……」

リリの席に、ユメがやってくる。

ユメ「（気付いてない）いらっしゃいませ。
♪注文はお決まりでしょうか……。」

（リリに気付いて大声で）って、ええっ！ うそ！ なんで！」

リリ「しーっ！ 声、おおきい」

ユメ「あっ、ごめん…」

リリ「約束まで時間あつたからきてみた」

ユメ「くるなら言つてよー、あー、びっくりした」

リリ「制服、ヒラヒラしてて可愛い」

ユメ「そうなの！ かわいいでしょ？」

この制服着たくて、バイト先に向じたの」

リリ「似合ってる。

そういう女の子らしい服着こなせちゃうのがユメだよね」

ユメ「リリも似合うと思うけど？」

リリ 「私は無理無理。顔の系統が違うって」

ユメ 「そうかなあ？」

リリ 「ほら、注文は？」

ユメ 「ああ、そだつた。

(かしこまる演技で) 何になさいますか? お客様」

リリ 「どうしようかな。

店員さんのオススメは?」

ユメ 「んー、たとえば:『アレ』とか?」

リリ 「『アレ』とは?」

ユメ 「『アレ』でございます。」

お客様が好きなものです」

リリ 「……よく私の好きなものわかりますね?」

ユメ 「優秀ですか?」

リリ 「ふむ。では、店員さんを信じましょう」

ユメ 「それより私、もう少しでバイトが終わりますので、

あとでご一緒しても?」

リリ 「よろこんで」

ユメ、リリの席から離れていく。

リリ、小さな声で独り言を呟く。

リリ 「……大丈夫そう、だつたかな?

この前こと」

リリ 「はあ……。私の馬鹿」

リリ 「どうして、ああいう雰囲気になると、恥ずかしくなっちゃうんだろうなあ。
……恋人になるって大変」

遠くの方でユメが談笑している声が聞こえる。

ユメ 「(バイト仲間と話して) ふふつ、ちょっとやめてー。
ふふふつ、ねえって！」

リリ 「(ぼそっと) ……楽しそう」

ユメ、リリの元にドリンクを持ってくる。

ユメ 「お待たせしましたー。
『アレ』でござります」

リリ 「あー、なるほどー！」

ユメ 「どうでしょう？」

リリ 「さすが優秀な店員さん、お見事」

ユメ 「ふふつ、伝票、ここに置いておくね」

リリ 「うん。

ユメ 「なんか、仲良さそうだね」「え？」

リリ 「バイトの子たちと」

ユメ 「そう、年近い子が多くて。

ごめん、あとちょっと待つって」

リリ 「全然、焦らなくていいよ」

ユメ、リリの席から離れていく。

ユメ 「(バイト仲間と話して) はーい。
もう、わかってるつて～」

ユメ、リリの席から離れていく。
リリ、ドリンクを飲む。

リリ 「（息を吐いて）ふうー……。

本でも読も」

リリ、鞄から本を取り出し、読書をする。
しばらくすると、ユメがやってくる。

ユメ 「お待たせ！」

結構、待たせちゃった？」

リリ 「ううん、大丈夫」

椅子を引いて着席するユメ。

ユメ 「何読んでたの？」

リリ 「火曜の二限で紹介してた本」

ユメ 「さすが、まじめ！」

リリ 「面白そうだったから。

いつからバイト始めたんだっけ？」

ユメ 「最近、二週間くらい前？」

リリ 「すごい馴染んでる」

ユメ 「人と仲良くなるのは得意だからね」

リリ 「へえ。上手くやってるんだ」

ユメ 「どう？ 安心した？」

バイトしてる姿みて。

ちゃんと働けてたでしょ？」

リリ 「そうだね」

ユメ 「なんか、素っ気ない反応」

リリ 「別に。よかつたと思うよ？」

ユメ 「ほんとに、そう思つてる？」

リリ 「思つてるって」

ユメ「あのさ……。

もしかして、気にしてる?」

リリ「え?」

ユメ「私が、その、この間ちょっと、

アプローチし過ぎたこと」

リリ「あ、いや、そんな……」

ユメ「ごめん」

リリ「私こそ、ごめん。

まだ色々慣れてなくて。

でも、私も変わっていきたいと思つてたから。

ユメを見習つて」

ユメ「……」

リリ「……私、今ままじやダメなんだって思つた。

ユメ、可愛いから、

グズグズしてたら他の人に口説かれちゃうと思つたし」

ユメ「何の話?」

リリ「ほら、仲良く喋つてたじやん。あれみて……!」

ユメ「……え、もしかして、嫉妬した?」

リリ「……」

ユメ「嫉妬?」

リリ「……うるさい」

ユメ「(歓喜して)えーーー! なにそれー!」

リリ「うるさい! うるさい!」

ユメ「いますぐ抱きしめたい。

抱きしめる!」

リリ「もう、違うからあつ!」

リリ、激しくリアクションしたせいで、
ドリンクをこぼしてしまった。

リリ 「あ……」

ユメ 「（吹き出して） ふつ、はははっ！」

あーあ、こぼしちゃってー！」

リリ 「（落ち込んで） うわあー。

この服、最近買ったばっかなのに」

ユメ 「拭くものあるよ」

リリ 「ごめん、ありがとう」

リリ、ユメからハンカチを受け取って拭いていく。

リリ 「あーあ、よりによつて、白着てるときに……。バチが当たったなあ」

ユメ 「大丈夫大丈夫。すぐ洗えばシミにならないから」

リリ 「……着替えたい」

ユメ 「じゃあこの後、服でも買いに行く？」

リリ 「それもいいけど……。

あ、でも、いや……。

一回うち戻ろうかなあ」

ユメ 「そう？」

リリ 「…………うち、くる？」

ユメ 「え！ いいの？」

リリ 「この前、ユメの家も行かせてもらつたし、

そのお返しというか」

ユメ 「いきたい！」

あ、でも、私、彼女の家のつもりでいくけど？」

リリ 「……うん、一応そのつもり」

ユメ 「え……？ （嬉しそうに） え～！」

あ、ちょ、ちょっと、

別にそんな、無理しなくても」

リリ 「無理はしてない」

ユメ 「じゃあ、期待しちゃうよ？
キスも、その先も」

リリ 「……待つて。

えっちなことはなし」

ユメ 「（とぼけて）え？ なに？」

リリ 「えっちなことはなし！」

ユメ 「えー！」

リリ 「急にそこまでは無理！」

ユメ 「いざれするんだよ？」

変わっていくチャンス！」

リリ 「良いように言わない」

ユメ 「大人の階段登ろうよ」

リリ 「ほら、いくよ！」

ユメ 「はーい」

リリ、ユメ、席から立ちその場を立ち去る。

【Scene03：はだかのいりや -お風呂のアヒル視点-】

▼リリの家・お風呂

・風呂場に浮いているアヒル視点

リリの家に遊びにきたユメ。

おうちデートをして、お泊まりすることに。

先にお風呂に入るリリ。

湯船に浸かってゆっくりしている。

リリ 「(息を吐いて) フう……」

浴室の扉が開いて、ユメが入ってくる。

リリ 「(きづいて) ん?」

ユメ 「お邪魔しまーす」

リリ 「え、ち、ちょっと!」

ユメ 「ふふっ」

リリ 「何、勝手に入ってきてるの!」

ユメ 「だって、お泊まりするつてことは、
一緒にお風呂入るつてことでしょ?」

リリ 「違う!

と/or いうか本当に泊まつていく氣?

ユメ 「まあまあ。リリ、落ち着いて」

リリ 「落ち着いてる! あつ!」

ユメ 「失礼しまーす」

ユメ、湯船に入つてくる。

ユメとリリ、隣に並んで風呂に入る。

ユメ「はああ……気持ちいい」

リリ「もう……狭いよ」

ユメ「うん、ぎゅうぎゅうだね」

リリ「結局、シーズン1全部見ちゃったね」

ユメ「あれは途中でやめられないよ」

リリ「ね。止められなかつた。

気づいたら、外、真っ暗でびっくりしたよ。

時間経つの早い」

ユメ「リリと一緒にいる時はいつもそうだよ」

リリ「私たち、仲良すぎ」

ユメ「ずっと一緒にいるもんね」

リリ「……ユメとお風呂に入るなんて、

何年ぶりだろう」

ユメ「小学生以来？」

リリ「中学の最初の方も入つてなかつた？」

ユメ「そだつたかも。

あの頃は、毎日お互ひの家、行き来してたよね。

リリが部活で忙しくなつてから、遊ぶ回数減っちゃつたけど

リリ「それでも十分遊んでたよ？」

ユメ「でも、減つたのは事実でしょ。

私、一時期、部活なんてやめちやばいのに、つて思つてた

リリ「えー？」

ユメ「寂しかつたの。

部活で、楽しそうにしてたから」

リリ「あー。

それは今日、私がユメのバイト先で抱いた感情と同じだ」

ユメ「ふふふ、おかしい。」

私たち、嫉妬し合つてゐる」

リリ 「私のは、嫉妬じやないけど」

ユメ「はいはい」

リリ「ユメ、髪の毛さりさり。

癖なくて羨ましい」

ユメ 「その分、お金かかるからねえ。」

何にしても刀が持つて居り

卷之三

卷之三

二二三

卷之三

卷之三

アーティスト

卷之三

一九〇〇年正月廿二日

二入一ノ学では、刀三はハスクヤレなしの、

口高一思し・さにヤ・カカレ

力学では新しいことやないがなべて

語したよれ〔?〕

二ノ一ノハサウエー

気になつてゐるけど

ユメ「霧雨氣いい感じだつたよね。」

私は、体力ないから絶対無理

リリ 「そういうユメは？ サークル

ユメ「今はバイトで手一杯だなあ。

それよりも、リリといっぱいお出かけしたい」

リリ「それは、しよう」

ユメ「身体、もう洗った?」

リリ「うん」

ユメ「そっかー。じゃあ、洗つて?」

リリ「じゃあってなに?」

ユメ「いいでしょ?」

リリ「昔よくしたじやん、洗いつこ」

リリ「いや、恥ずかしいよ、もう……。」

私、先上がってるから。

ゆっくり入りなよ」

ユメ「……やだ」

リリ「……え」

ユメ「……そういうの、嫌」

リリ「そういうのって……?」

ユメ「……（小声で）触つて欲しい」

リリ「え?」

ユメ「洗うのとか本当はどうでもいい。触つて欲しいの!」

リリ「え、え、……えっち!」

ユメ「子供みたいなこと言わないで!」

好きな人には触りたいし、触つて欲しいの、私は!」

ユメ、リリに身体を寄せる。

リリ「ち、ちょっと! ユメ! ?」

ユメ「……リリ。聞こえるでしょ? 私の心臓の音」

リリ「……う、うん」

ユメ「……こんなにドキドキしてる」

リリ「……」

ユメ「……慣れないのはわかるよ？」

だけど私、本気だよ。

今は無理でも、いつかは……（小声で）えっちなことだつてしたい

リリ「……」

ユメ「つて！伝えておきますね！」

リリ「は、はい！」

わ、わかりました！

……私も、その……よろしくお願ひします？

ユメ「（吹き出して）ぷつ、なにそれ？」

リリ「いや、その……あー。

私も、いつかは……。

ごめん、私のせいで困ってるよね

ユメ「……困つてます。

困りすぎて、好き」

リリ「……ううつ、私、頑張るから、頑張る。

もうちょっと待つて

ユメ「わかってるよ」

リリ「私も、ユメと恋人になつていきたい。なりたいの。
だから、変わりたい。

……だけど、ダメかも、全然」

ユメ「リリ？」

リリ「……ごめん。私、今日、ちょっと、強がっちゃつたみたい。

私、正直にいうと、変わつて、今までの関係がなくなるのが怖い。

……怖いの」

ユメ「……そつか」

リリ「……こんな場所でごめん」

ユメ「とりあえず、お風呂上がつたら、もうちょっと話そう」

リリ 「…わかった」

ユメ 「そうだなあ……。

アイスでも、買いにいこっか

リリ 「…うん」

【Scene04：違うふたり 回じきもち -小瓶視点-】

▼海の見える砂浜

・砂浜に落ちている小瓶の視点。

ユメ、リリのそばに近づいていく。

ユメ「ここの景色は変わらないね。

……だからかな。海を眺めていると落ち着く」

リリ「私も、悩んだときはよくここにきてた」

ユメ「ひとり黄昏（たそがれ）てるリリ、高校の時よくみた」

リリ「やめてよ。

ユメより私、勉強できなかつたし」

ユメ「そう？」

リリ「そうだよ」

ユメ「リリは、よく私と比較するよね。どうして？」

リリ「……色々と、理由はあるけど。

一番は、ユメのことが好きだから」

ユメ「好き……？」

リリ「……これは初めて言うけど、

私、ずっとユメみたいな女の子になりたいなって思つてた」

ユメ「え、私に？」

リリ「うん、憧れてたんだ。

ピンクやレースのついた服が似合つて、肌が綺麗で。

見た目も可愛いのに、自分の意見もしつかりあつて。

どれも、私には持つてないものだつたから」

ユメ「そんな、私は憧れる程の人じゃないって」

リリ「髪伸ばし始めたのも、ユメの影響つて言つたら？」

ユメ「嘘！」

リリ「嘘。でも半分本当」

ユメ「それどっち？」

リリ「どっちも」

ユメ「答えになつてない」

リリ「とにかく、私の中ではユメの存在は大きいんだ。

だから、ユメとの関係は大事にしていきたいと思つてゐる」

ユメ「……そう」

リリ「うん」

ユメ「……やつぱり、にぶい。にぶちん。にぶりり。」

リリ「え？」

ユメ「私も同じ気持ちだよ。

もつと、好きを伝えたいの。

もつと、私がリリの事どれだけ好きかわかつて欲しいし、
もつと、リリからの好きが欲しいの。

だから……。

あー、もう、言葉が出てこない

リリ「……」

ユメ「そっち、いつてもいい？」

リリ「……うん」

ユメ、リリのそばに近づいていく。

ユメ「……くつつくのは嫌？」

リリ「嫌じゃない。嬉しい」

ユメ「よかつた」

リリ「……ドキドキする。恐ろしいほど」

ユメ 「(笑って) その表現、何?」

リリ 「……怖かった。

ユメに触れられて、おかしくなりそうになる自分が。

この先、これ以上のことをしたら、どうなっちゃうんだろうって

ユメ 「どうなっちゃってもいいよ、リリと一緒になら」

リリ 「……どうにかなつても、嫌いにならない?」

ユメ 「もう、見縊(みくび)らないで!

こんなに好きって言つてるのに」

リリ 「……ごめん」

ユメ 「さつき、憧れてるって言われた時、

私もリリの好きなところ、いっぱい言おうと思った。

けど、やめた。どうしてかわかる?」

ユメ、瓶の方に歩いていく。

リリ 「……」

ユメ 「私はね、リリがリリだから好きなの。
どこがとかじやないの。」

リリのいない世界なんて、考えられない。

それだけはずつと、変わらないよ」

リリ 「……ユメ」

ユメ、リリにキスをする。

リリ 「……キス」

ユメ 「しちゃったね」

リリ 「……すごい」

ユメ 「なにが?」

リリ 「……世界がキラキラして、泣きそう」

ユメ「どうか、泣いてる！涙出てるよ！」

リリ「うん、泣いてる」

ユメ「ふふふ」

リリ「……キスって、こんなに嬉しいものなんだね」

ユメ「もう知らない世界には戻れないでしょ？」

……あっ」

リリ、ユメにキスをする。

リリ「……うん。戻れない」

間。

リリ「……思つたんだけど」

ユメ「なに？」

リリ「変わるもの、変わらないもの。

一つあつていいんだね」

ユメ「そうだよ。

どっちも必要なの。

どちらかだけじゃダメ。

二つあるのが重要」

リリ「そつか。単純なことだった。

……極端に考えすぎた」

ユメ「私も、焦つてるところあつたかも」

リリ「恋愛初心者だ、私たち」

ユメ「でも、一緒に悩めてよかつた。

……ねえ、こういうやりとりってさ

リリ「カツプルみたい」

ユメ・リリ「ふふふ（笑う）」

リリ 「あ！」

ユメ 「なに？」

リリ 「アイス」

ユメ 「あー！ 待って待って！」

ユメ、袋の中のアイスを確認する。
アイスはカップ形状のものを想定。

リリ 「どう？」

ユメ 「溶けてる…」

リリ 「でも、冷凍庫に入れたらなんとかなるかも」

ユメ 「帰つてすぐ入れよ」

リリ 「そうしょ」

ユメとリリ、立ち上がる。（袋を持って）
そして歩き始める。会話が段々遠ざかっていく。

ユメ 「今日、同じベッドで寝てもいい？」

リリ 「え？ そのつもりだつたけど…。

あ、でも」

ユメ 「わかってる。えっちなことはしない」

リリ 「ほんとに？」

ユメ 「ほんとほんと」

リリ 「ほんとに？」

ユメ 「ほんとほんとほんと！」

リリ 「……ちょっとだけなら」

ユメ 「え！」

リリ 「……やっぱなし」

ユメ 「なんでよー」

【Scene05：ベヴィー・ドリーム -ぬいぐるみ視点-】

▼リリの部屋・ベッド

・リリの部屋にある「ぬいぐるみ」の視点。

ユメ「ふふふっ」

リリ「何？ 笑って」

ユメ「……リリの匂いがする、枕」

リリ「ねえー」

ユメ「(枕に顔を押し付けて) んん～～～」

リリ「ちょっと、やめてよ！」

ヘンタイっぽい「

ユメ「ヘンタイじやダメ？」

リリ「ダメです。ほら、寝るよ」

ユメに背中を向けて寝る体勢をとるリリ。
少し間があつて

ユメ「……ねえ」

リリ「ん？」

ユメ「(ちょっと笑いながら) ……ヘンタイじやダメ？」

リリ「ダメだって」

ユメ「ふふふふっ」

じゃあ……(少したためてから)
ぎゅ、つてしてもいい？」

リリ「……うん」

ユメ、リリの後ろからハグして

ユメ「……ふふふつ、あつたかい」

リリ「……」

ユメ「……不思議だよね。

くつついてるだけなのに、

なんでこんなに、幸せな気持ちになるんだろう

リリ「そうだね」

リリ、身体を動かして、ユメの方向を向いて抱きしめて

リリ「……私も、抱きしめたい」

ユメ「……いーよ」

間。

ユメ「(寝息を立てる)」

リリ「(呼びかけて)……ユメ。

(確認して)……寝ちゃつた。

(キスをして)……ちゅつ。

……おやすみ」

【Bonus：愛してるゲームを観察する -ぬいぐるみ視点-】

▼ユメの部屋（昼）

・ユメの部屋にある「ぬいぐるみ」の視点。

リリは本読んでいる。

ユメ「ねえ」

リリ「ん？」

ユメ「ねえ、ねえ」

リリ「なに？」

リリ、ユメに視線を送る。

ユメ「……『愛してる』」

リリ「（ちょっとびっくりして）……ありがとう」

ユメ「ほら、返して？」

リリ「私も好きだよ？」

ユメ「違う！『愛してる』！」

リリ「……愛してる」

ユメ「（すぐ）愛してる！」

リリ「（笑って）ふふふ、もう、なに？ いきなり」

ユメ「はい、笑った！」

リリの負け！」

リリ「負けって何よ？」

こっちは本読んでたんですけどー？」

ユメ「それは一旦置いて」

リリ「はい」

ユメ 「愛してるゲーム、やろ！」

リリ 「え？ ああ、あの、

お互いに向かい合って交互に『愛している』と、
色々なパターンやシチュエーションで伝え合い、
照れたり笑つたりしたほうが負けというゲームだね」

ユメ 「説明ありがとう。

早速やろ！」

リリ 「私、本の続きを読むだけど…」

ユメ 「勝つたら続きを読むでいいよ！」

リリ 「負けたら？」

ユメ 「ちゅーして？」

リリ 「勝つたら現状維持で、負けたらご褒美…。微妙に緊張感がない」

ユメ 「んー、じゃありりが勝つたら、
私に好きなことお願いしていいよ？」

リリ 「……やる」

ユメ 「よし、決まり！

三本勝負ね！」

ユメ、リリ、移動してぬいぐるみの近くに来る。

ユメ 「準備はいい？」

ゲームスタート！」

リリ 「……」

ユメ 「……」

リリ 「これ、どっちから言う？」

ユメ 「あ、（ちょっと笑つて）え、じゃあ私から！
(軽く) ……愛してる」

リリ 「(フラットに) 愛してる」

ユメ 「(可愛く) 愛してる!」

リリ 「(しつとりと) ……愛してる」

ユメ 「(にやつとするのを堪えながら) 愛してる!」

リリ 「(近づいて、もう一度真剣に) 愛してる」

ユメ 「(堪えていた笑いが漏れる) ふふふふ

リリ 「あ、笑った」

ユメ 「ふふふつ、そんな真剣に言われたらずるいよー!」

リリ 「そういうゲームでしょ?」

ユメ 「余裕ぶつて……」

普段そういうの、恥ずかしがるくせに「

リリ 「勝負となれば話は別」

ユメ 「じゃあ、次はリリから!」

リリ 「はい。」

(一呼吸おいて) スタート。

……愛してる」

ユメ 「(堪えて) んーー」

リリ 「あれ、今?」

ユメ 「笑つてない。」

……ねえねえ、こつちきて?」

リリ 「……」

ユメ 「きて?」

ユメ、リリを抱きしめて

ユメ 「はい、ぎゅー……。」

(耳元でゆっくり) 愛してるつ」

リリ 「ふふつ」

ユメ 「はい、私の勝ちー!」

リリ 「ねえ、ちょっと今のずるくない?」

ユメ 「愛してる、って『』いさえすれば、なんでもありなんだよー？」

リリ 「あー、そういう……。

わかった。もう遠慮しないから！」

ユメ 「これで最後。スタート！」

（耳元で） 愛してる」

リリ 「（耳元で） 愛してる」

ユメ 「愛してる」

リリ 「愛してる」

ユメ 「……愛してる」

リリ 「……愛してる」

ユメ 「愛してる」

リリ 「愛してる」

ユメ 「（色っぽく） 愛してる」

リリ 「（なんとか堪えて） んーー。

（深呼吸する） すうう……はあ……。

ユメ、私、本当に、心の底から……」

ユメ 「……」

リリ 「あいしてーるつ！」

リリ、ユメを勢いでぐすぐる！

ユメ 「え！ ちょ、ちょっとー！」

ふふふふふつ、はははっ！！！」

リリ 「（くすぐりながら） はい勝ったー！！！」

ユメ 「ふふふつ、もおー！ ずるいズるいーー！」

リリ 「なんでもありって言つたのはユメだよ？」

ユメ 「『愛してる』で笑わせてないじょん！」

ルール違反！」

リリ 「あ、それはそうか」

ユメ「じゃあ私の勝ちでいい？いい？」

リリ「まあ、いいか」

ユメ「それじゃ約束通り。

ちゅーして？」

リリ「いいけど……。

（小さい声で）私、勝つたら、ちゅーして貰おうと思つてた

ユメ「え、なにそれ――！」

（小さい声で）かわいい

ユメ、リリにキスをする。

リリ「ユメ……」

ユメ「……えへへ、こんどは私にして？」

リリ「……う、うん」

リリ、ユメにキスをする。

ユメ「ふふふ、愛してる！」

リリ「私も。愛してる」

ユメ・リリ「ふふふ」